



発行 **東京清陵会** (諏訪清陵高等学校同窓会・東京支部) 会長=藤森宏一 編集 第80回生(昭和49年入学)

事務局 〒113-0033 文京区本郷1-10-14 加奈利屋館7F 小林公認会計士事務所 気付 TEL&FAX 03-3812-5887 DTP=スタジオパラム 印刷=中央印刷株式会社

# 自反而縮雖千萬人吾往矣

(みずからかへりみてなをくんば せんまんにんといへどもわれゆかむ)

## 諏訪の地を離れても「清陵の魂」は生き続けている

40年前、緊張の一方で退屈な入学式の式典が終わったあと、校庭に出された私たちを迎えたのは、2年生、3年生たちの怒号と墨文字で書かれた「自反而縮雖千萬人吾往矣」の大きなのぼり旗だった。その瞬間から諏訪清陵高校に学ぶ我々は、18番にも及ぶ長い校歌とともに、この魂の言葉を心に刻みながら3年間を過ごし、やがて多くは諏訪の地を離れ大学を経て社会に出ることになる。

そして、何年か経って気づく。我々の心には、この言葉がずっと沁みついていることを。

母校は、創立120周年を迎える2014年から中高一貫教育が始まり、また新たな歴史が刻まれようとしている。ただ、どんな時代に



母校校庭の石碑

なっても、どこに暮らしても、この言葉は、色褪せず、清水ヶ丘に学んだ(これから学ぶであろう)清陵生にとっての「魂」として心のどこかに生き続けることは間違いない。

「自反而縮雖千萬人吾往矣」。元をただせば、大正デモクラシーの時代に我々の先輩方が校是として刻んだ言葉で、もとは孟子の言葉だそう。自分の行いを振り返ってみてそれが正しい事ならば、たとえ敵が千萬人いようとも私は自分の道を進んで行こう。

そんな原点に立ち返って、担当幹事である我々は、この言葉を胸に、世界を舞台に活躍する5人の方々にお話を伺うことで、「清陵の魂」=「諏訪清陵の力」を再認識したいと思う。(脇坂守一)

### Contents

- 「世界に咲く清陵の花インタビュー」  
～民族融和を目指す指揮者～ ..... 2  
柳澤寿男氏
- 「フットニクスポリマーの研究成果を社会に還元」 ..... 4  
慶應義塾大学理工学部教授・小池康博氏
- 「日本の若者、清陵生に伝えたいこと」 ..... 6  
公益財団法人  
国際人材育成機構会長・柳澤共榮氏
- ジャーナリスト対談 ..... 8  
「世界の安定と日本の安全」  
宮坂宜男氏×伊藤力司氏
- 懐かしい諏訪清陵高校校舎が  
模型になりました!  
ワーキング・グループ活動報告 ..... 10
- 特別企画  
2013年度諏訪清陵高校同窓会  
パネル・ディスカッション  
「学校知から社会知へ～社会が必要とする  
真の学力・人間力を求めて」 ..... 11
- 同窓会定期総会報告  
東京清陵会総会報告 ..... 14
- 会計報告 ..... 15
- 2012年東京清陵会会務報告  
年次計画/訃報 など ..... 16

2013年度

## 東京清陵会 第47回定期総会案内

清陵の魂を  
共に語ろう

日時=2013年10月18日(金) 午後5時~8時30分

総会=午後5時~5時50分 懇親会=午後6時~8時30分  
(午後4時30分より受付開始)

場所=アルカディア市ヶ谷(私学会館) 4F「飛鳥」・3F「富士」  
東京都千代田区九段北4-2-25 ☎03-3261-9921  
市ヶ谷駅(JR、東京メトロ有楽町線、南北線、都営新宿線)  
下車、徒歩2分

議題① 2012年度会務報告 決算報告 ② 2013年度事業計画 予算案  
③ 会費・納入方法の改訂について ④ その他

懇親会=会費 8,000円(学生2,000円)

※当番幹事=80回生、次期当番81回生、サブ幹事90回生、100回生

●ご面倒ですが出席、欠席いずれの場合でも同封の返信用はがきにご記入の上、9月30日(月) 必着にてご返送ください。



## 世界に咲く清陵の花インタビュー

「やはり直に目と目で見て話すことが大事」

# 民族融和を目指す指揮者 柳澤寿男氏

### ～コソボにて思う「自反而縮雖千萬人吾往矣」～



ニュースウィーク日本版にて「世界が尊敬する日本人100」に選ばれた同窓生、バルカン室内管弦楽団音楽監督の柳澤寿男氏(93回生)を御存じですか? NHK他各種マスコミや教科書にも取り上げられ、BSジャパンの「戦場に音楽の架け橋」は日本放送文化大賞グランプリを受賞しました。バルカン半島と日本を行き来し、音楽の力と共に常に挑戦を続ける42歳。年半分以上を旧ユーゴスラビアで生活している柳澤氏ですが、帰国中の氏にお話を伺うことができました。

## 指揮者を目指したきっかけは

清陵高校から音大に行く人はあまりいません。それで、進路指導もないまま何とか国立音楽大学に進学しました。特に音楽家になろうと思っていたわけではなく、音楽の先生になろうと思っていたのですが、教員の採用がなく、ふらふらしていた1996年2月26日、初めての海外旅行でウィーンに行きました。

飛行機の中で、小澤征爾さんが指揮するウィーンフィルの演奏会がその日にあることを知り、着いてそのまま会場に。そこで、全員が外国人のオーケストラを一人の日本人がイニシアティブを取っている姿にすごく感動しました。

演奏会場に入る時はただの観光客だったけれど、出る時は「自分は指揮者だ」指揮者になると決意していたんです。

その後指揮科も出ていないからと断られ続けた後、指揮者佐渡裕さんに出会い弟子となりパリに行きました。

## バルカンの旧ユーゴスラヴィアへ

2000年に東京国際音楽コンクールを受け、2位になりました。2位ってというのが良かったかな。悔しかったですが良い糧になりました。入賞して日本で活動中2004年マケドニアでオペラを振るといふオファーが来ました。行ったら、民族対立がすごいです。平和な日本では考えられなかったんです。

仲が悪くて隣の国の情報がほとんどないんです。10キロ先のコソボのことが全然わからない。その時国連職員の方が「コソボにもオーケストラありますよ」と言うので、2007年一緒にセルビア共和国コソボ自治州に行ってみました。

この時アルバニア人音楽監督のバキさんに出会い、3月25日のローマ条約50周年イベントでベートーベンの第7交響曲を振ることになりました。

## 「音楽に国境があってはいけない」

コソボは旧ユーゴの一部で、スラブ系民族がいっぱい住んでいたところに、ここ100年でアルバニア人と言う人たちが移動してきて、コソボの90%がアルバニア人になってしまいました。コソボはセルビア正教の総本山みたいなもの、日本

でいう京都みたいな所です。そこで警察署とかトップの人はセルビア人で雇用者はアルバニア人、学校の授業もセルビア語で、軍隊でもアルバニア語はしゃべっちゃいけない等色々あって、対立が始まってコソボ紛争になった。それを止めたのがアメリカです。NATO軍が空爆をして99年に紛争は終わり、私が行った時は国連暫定政権下でした。

第7交響曲のリハーサルの休憩の時、バキさんと話していたら、怒りながら「今セルビアが攻めてきたら、楽器を捨てて絶対戦争に行く」と言うんです。アルバニア人のバキさんは、NATO軍の誤爆で身内が亡くなって、家族がショックで入院したり大変な想いをしていました。

そして演奏会当日、NATO兵も誰もかもスタンディング・オベーションでベートーベンを振り終えたら、バキさんが真っ先に来て、泣きながら「あんなことを言って悪かった。やっぱり音楽家はそんなことを言ってはいけない。音楽に国境があってはいけない。」と。

平和ボケした日本人が指揮する演奏会で、彼が感動してくれた。日本人がイニシアティブを取る中で彼が改心してくれた。変わったのが音楽の力だというのが突き刺さりました。その一言でコソボフィルでやっていく決意をしたわけです。



●やなぎさわ としお / 1971年下諏訪生まれ。パリ・エコール・ノルマル音楽院オーケストラ指揮科に学ぶ。現在バルカン管弦楽団音楽監督、コソボフィルハーモニー交響楽団首席指揮者、ベオグラード・シンフォニエッタ名誉主席指揮者等で活躍。著書「戦場のタクト」(実業之日本社)



## 民族共栄のオーケストラ

当時コンボフィルは紛争後生き残った13人の弦楽器奏者のアルバニア人しかいませんでした。

「音楽に国境があってはいけない」というバキさんの言葉に、交流のなくなった人たちをつなげていく民族共栄のオーケストラを作ろうと、2007年7月「バルカン室内管弦楽団」を立ち上げました。

セルビア人もアルバニア人もマケドニア人も楽団員は「是非やりたい」と言うけれど自分たちでは言い出せない。ニュートラルな立場の日本人を接着剤として、年一回集まって民族融和のオーケストラを、と始めました。が、スタート時は単一民族のみでした。

## 「対立の橋」を「再会の橋」へ

すごい瞬間が来たのが、2009年5月17日。コンボの北にミトロヴィツァという町があります。テレビ番組にもなりましたが、街に一本の川がありまして、その川の南側にアルバニア人、北側にセルビア人が住んでいます。自由に行き来できる橋があるのですが、いつからか「対立の橋」と呼ばれるようになり、誰も渡りません。10年くらい前までそこで殺し合いをしていたんですから。



写真:木之下晃(右上も)

その橋の南と北で演奏会をやりようと思いついてしまい、国連にも地元の市長さんにも相談し対策を練りました。

演奏者の名前を公表しないと、3日前までは行うことを秘密にすると、セキュリティを強化し、NATO軍とコンボ警察に厳重に守ってもらい、リハーサルは第3国のマケドニアで実施しました。

観客も民族を混ぜたかったのですが諦め、とにかくオーケストラの楽員だけは混ざっている素敵な演奏会をしました。終了後、南で軍隊に見守られながら打ち上げをして、橋の所で別れましたが、皆アドレス交換をするんです。その中でセルビア人の一人が、この「対立の橋」を「再会の橋」にしたい、と言ってくれました。感動的な光景でした。

## 世界中から評価、世界史教科書に

そのことが国連から高い評価を受け、2009年国連総会に付随するイベントで、バルカン諸国の大統領、首相の前でバルカン室内管弦楽団が演奏をしました。

世界中の様々な所から演奏によばれるようになり、平成25年の実教出版の世界史Aにもバルカン室内管弦楽団が取り上げられました。

コンボにいと毎日「歴史をつくっているんだな」という認識があります。治安面や停電と断水、劣化ウラン弾による放射能汚染等で生活は大変ですが。

## バルカン半島で清陵だんと思う

まさに旧ユーゴでやっている時に「雖千萬人吾往矣」という言葉はいつも思い浮かべます。それは本当によく。

清陵では吹奏楽部。トロンボーンと指揮を担当。当時の恩師長谷川先生は、辞めたいと思った時に先に「何も言わないで続けたらどうか」と一言。あの時辞めていたら今はなかった。



大使館などに「できるわけがない」ってよく反対されるんですが、「できない」と言われると絶対やるんですよ。「やる気出ちゃったな」って。そういう血なんですね。良くも悪くも「吾往かん」精神であるといつも思うんです。ただ、良い方に働いている方が多いと思います。

## 世界平和コンサートの道「会う」ことで平和をつなぐ

2014年6月28日がサラエボ事件の100年目なんです。第1次世界大戦の始まりから。この日このサラエボでベートーベンの「第9」をやろうと。サラエボは共産圏で初めてオリンピックが開かれた町ですが、オリンピックのサッカーグラウンドがお墓になってしまうほど、ボスニア紛争等でいっぱい死者が出ている町です。そのサラエボで、日本人がイニシアティブを取りながら、旧ユーゴの色々な民族の人たちの合唱とオーケストラで「第9」を。今はネット社会ですが、やはり皆が「会う」ことによって、「目と目で見て話す」ことによって、誤解が解けて交流は始まります。

自分の国も同様で、今年12月には「アジアをつなぐオーケストラ」をアセアン10カ国+日中韓(北)でつくろうと思っています。その前、夏の新宿での群衆オーケストラを皮切りに。新宿からサラエボへの一連の流れ全体を「世界平和コンサートの道」というイベントとして。

そしてサラエボの「第9」が、今までは同情で注目されていたバルカンが、名実ともに世界に出ていくスタート地点になればと考えています。(野々山理恵子)

## 「音楽は平和のメディア」

昨年101歳のお誕生日のお祝いの中でバルカン室内管弦楽団を指揮した聖路加国際病院理事長の日野原重明先生。それをつないでくれた清陵66回生の周術期センター長宮坂勝之先生(岡谷出身)。日野原先生は作曲もされる音楽家で、サラエボ事件からの100年を生きてこられた方。人と人を結ぶ音楽の力を「平和のメディア」だと話されました。



清陵OBインタビュー

～未来は自分で作るもの～

# フォトニクスポリマーの研究成果を社会に還元

慶應義塾大学 理工学部教授 **小池康博氏**



小池康博氏（76回生）は高速光通信を可能としたプラスチック光ファイバーの発明者として国際的に極めて高い評価を受けている。2009年、内閣府が設けた「最先端研究開発支援プログラム」に同氏の研究課題が採択された。また、従来の透明液晶バックライトの2倍の明るさを可能にする「光散乱導光ポリマー」にて基本特許を取得した。日本のモノづくり復興を目指す同氏にお話をうかがった。

## 注1 フォトニクスポリマーの研究により、Face-to-Face コミュニケーション産業の創出を目指す

小池教授は、フォトニクスポリマーの研究により、超高速・高精細双方向映像伝送技術開発、高速・低価格家庭内光ネットワーク開発、Face-to-Face コミュニケーション産業の創出を目指している。

## 「自反而縮 雖千萬人吾往矣」の反骨精神で30年以上、研究活動を継続

私は「自反而縮 雖千萬人吾往矣」の反骨精神で30年以上、フォトニクスポリマーの研究を継続しています。研究の成果は日本初の光技術実用化です。内閣府が創設した「最先端研究開発支援プログラム」制度のもと、日本で30人の研究者を選びました。補助金はプログラム全体で1,000億円、私のプロジェクトは42億円です。この中にはiPS細胞研究の山中伸弥先生を含めて錚々たる人がいま



展示室でお話をうかがう横内徹、野々山理恵子編集委員

す。今年度はプログラムの最終年度にあたり、論文を書いているだけでなく国民に見える形で成果をだす必要があります。いってみればあたりまえです。お金をいただいているわけですから。

## 今こそ、日本から生まれた液晶産業の復興を

フォトニクスポリマーのプロジェクトでは、家庭内の配線をプラスチック光ファイバーにすることによって、簡単に繋げて、しかもガラスより高速通信ができる今までの延長線上ではないポリマー、それから液晶を対象としています。液晶は日本から生まれたものです。ソニーのブラビア (BRAVIA) は毎年13兆円の売上がありますが、これがお荷物分野になっている。今こそ、日本から生まれた液晶産業の復興をと思っています。皆さんの見ている液晶テレビにはフィルムが数枚入っています。液晶パネルにおけるコストの6割は、プラスチックのフィルムとバックライトが占めています。また、液晶がよく見えるかどうかはフィルムそのものの性能によるといっても過言ではありません。我々が提案する複屈折ポリマーや光散乱導光ポリマーは、今まで必要だったフィルムがいらなくなります。したがって極めて安いパネルで極めて高精細の画像ができます。活用例は例えば病院です。今私は慶應義塾大学病院と「医工連携」に取り組んでいます。日吉の理工学部と信濃町の大学病院がリアルタイムで繋が

●こいけ やすひろ／1954年4月7日生  
現職  
慶應義塾大学理工学部物理情報工学科 教授  
理工学研究科総合デザイン工学専攻 教授  
専門分野  
高速GI型ポリマー光ファイバー・高輝度光散乱導光ポリマー  
ゼロ複屈折性ポリマー・高出力ポリマー光ファイバー増幅器・レーザー  
屈折率分布型ポリマーレンズ等をはじめとするフォトニクスポリマー  
経歴  
1982年3月 慶應義塾大学大学院工学研究科博士課程終了(工学博士)  
1989～90年5月 米国ベル研究所研究員  
2004～2008年3月 慶應義塾先端科学技術研究センター所長  
2006年 紫綬褒章受章  
2010年4月～ 慶應義塾大学フォトニクス・リサーチ・インスティテュート所長  
2010年11月～ 慶應義塾評議員

り、癌の初期の初期でも画像を拡大すると見えるわけです。慶應義塾大学病院が世界に先駆けて導入した我々のシステムでは、ディスプレイの角度を変えても、圧縮しても色が変わりません。極めてリアルなんです。それが私のいう「Face-to-Face コミュニケーション」注2です。

## 1982年の転機

私はなかなか認められませんでした。6mのプラスチック光ファイバーができたのは1982年。私がはじめて慶應義塾大学から博士号をもらった時です。プラスチック光ファイバーは6mしか光を通しません。これでは使いものになりません。この時が私の転機でもあり、潮時かなと思いました。プラスチック光ファイバーの透明性を高めるために、みんなごみを取り除いてファイバーにしている時

に、私は屈折率分布をつけるために別のものを加えてファイバーを作っていました。当時は「それ、不純物を加えて作るのと同じことじゃないの」と認められず、今でこそ、「そんなことはない。透明にすることと不純物は別なことだ」と皆さん認めてくれますが、当時は別のものを加えて透明にするという提案はなかなか理解されませんでした。

その時、レンズの研究をしているロチェスター大学のダンカン・ムーア教授に出会いました。レンズに屈折率の分布をつけていると一眼レフのレンズについている10枚のレンズが極端な話、2枚になります。それはレンズだからプラスチック光ファイバーほど透明じゃなくてもいいんです。教授にハワイで出会って「小池さん、プラスチック光ファイバーの研究はあきらめて自分の研究にこないか」と誘われました。それが1982年です。コダック、ポラロイド、ゼロックスの本社、全部、ロチェスターにあります。「光」のメッカです。「そこに来ないか」ということは「新天地でやる」ことです。光が6mしか通らないプラスチック光ファイバーを諦めて新天地でやるのは、何とも甘酸っぱい気分でした。ところが渡米が近づいてきた時（慶應の中にポジションはありませんでした）、私の上司（大塚保治先生）が「ポジションがあくよ」ということを伝えてくれたのです。私の心は揺らいできました。ここで「本当にプラスチック光ファイバーを諦めていいのか」という気持ちになりました。結局、ムーア氏に「行きません」と伝えました。

## 挫折、努力をへて 大きな夢の実現へ

プラスチック光ファイバーが光を6mしか通さないのは、光が散乱することが起きていたからです。散乱すると通らなくなってしまう。散乱損失するというところで悩みに悩みました。私が清陵生、学生に言いたいのは「迷うな」と。「わからない時や壁にぶち当たっている時は成長している時だ」と。私は簡単にプラスチック光ファイバーができていたら学者になっていなかったでしょう。成果が出ないときにはなぜ光が散乱するんだと

いうことに自分の思いがどんどん深くなっていきます。アインシュタインやデバイ<sup>注3</sup>の論文に線を引いてぼろぼろになるまで学ぶ中に答えが出てきました。私はそれで世間から排他されずに大学に残ってこのようなプロジェクトをやっています。

清陵生、学生は悩みがあるでしょう。こうなりたと思って成績が悪かったりして、「どうしたらいいんだ」と。そう考えることが成長していることなのです。成長というのは、その時できなかったことができるようになる。単純なことです。私はそういうことを経験しました。散乱損失の理由は何かというの、掘り下げていったところに答えがありました。それは誰も手をつけないブラックボックスです。その中に入るのには勇気がいります。何年もかかるし。考えてみたら8年は成果がでませんでした。その原因が何か、わかった瞬間に散乱損失が一気に下がるんです。

今はこの「屈折率分布型プラスチック光ファイバー」で基本特許をとりました。そして、旭硝子から「フォンテックス」という名前でも従来のプラスチック製光ファイバーの限界を超える製品が市販され、そのシステムは慶應義塾大学病院に導入されました。

また、東洋紡が販売しているフィルムは、サングラスをかけても液晶画面が非常によく見えます。来年の液晶ディスプレイには搭載になります。大切なのはやはり「夢をもつこと」です。小さな夢ではなく大きな夢を持つ。こうなりたい、こうしたいと大きな夢を持つ。なかなか実現しないから「夢」と思った方がいいです。そうするとどうやって実現していくかということが「志」になります。実現できないところ、そこに努力があり、それが成長だと思います。

## 未来は自分でつくるもの

清陵の後輩たちは、今、まさにイノベーションの手前にいるのかもしれない。イノベーションは突然にドアが開くんです。ある時にわかります。自分で誠実に一歩一歩、未来をつくっていくために自分がいます。「あなたは何で生きているんで



わからない時は成長している時

すか？」という本質そのものです。お腹がすいていて食べるために生きているのか？「生きがい」というものがあるわけです。それは「ドリーム」に繋がる。それは自分で作っていくものです。インターネットが普及して便利になります。ただ便利になることが幸せではありません。自分がいて、未来は自分で作っていくんです。誠実に一歩、一歩。そういうことだと思います。

（横内 徹）

注1・「フォトリソグラフィ」とは、ポリマー物質学と光学を融合することにより生まれた新しい光機能性ポリマーのこと。ポリマーは、IUPAC（国際純正・応用化学連合）では、「1種または数種の原子あるいは原子団が互いに数多く繰り返し連結していることを特徴とする分子からなる物質」と定義している。

注2・高精細・大画面ディスプレイを用いた映像機器・携帯端末等を通して臨場感あふれるコミュニケーション＝意志の疎通、心や気持ちの通い合いが成立する状態。

注3・ピーター・デバイは、オランダ・ユーストリヒト出身の物理学者・化学者で1936年のノーベル化学賞受賞者。



なかなか実現しない夢をどうやって実現していくかが志になる

清陵OBインタビュー

～「志」をもって頑張れば必ず成功する～

# 日本の若者、清陵生に伝えたいこと

——公益財団法人 国際人材育成機構 会長 **柳澤共榮氏**



日本政府が創設した「技能実習制度」に基づき、インドネシア、ベトナム、タイの政府と協定を締結、外国政府直接派遣の技能実習生を受け入れている日本最大の団体が公益財団法人 国際人材育成機構（略称/アイム・ジャパン）。同法人の会長柳澤共榮氏（65回生）は、約20年前から活動に携わっている。3カ国の若者を受け入れている経験をもとに日本の若者、清陵生に伝えたいことを熱く語っていただいた。

## 新興国の技能実習生を受け入れ、サポートする日本最大の団体

国際人材育成機構に受け入れられた技能実習生は、3年間の実習終了後、日本で身につけた技能や知識を生かして現地で活躍している。柳澤会長は「技能や知識に加え、日本人の働き方をしっかりと学び、母国の経済発展に貢献する起業家を育てていきたい」との考え方で事業に取り組んでいる。

## 技能実習生による起業社数を3000から300万に

私共の理念は名刺にも記してありますが、「人づくりを通じ わが国の社会と産業の健全な発展に寄与します」「人づくりを通じ 開発途上国の経済発展に寄与します」、です。私どもの事業には3本の柱があります。一つ目は外国人技能実習生受け入れ事業。二つ目は日本の中小企業が海外へ進出する際のアドバイス。三つ目は若者の交流事業。若者の交流事

業は、毎年20名、日本の高校生をベトナム、インドネシア、タイに送ったり、またこの3カ国の政府が選抜した高校生を日本にホームステイさせたりするという事業です。私共のカウンターパートは全て外国政府で、インドネシアは労働移住大臣、タイは労働大臣、ベトナムは労働・傷病兵・社会大臣です。

私どもの事業を進めていくうえで、清陵で学んだことが大きな糧となりました。今からちょうど20年前の1993年にこの技能実習制度ができました。ところが当時の労働省、法務省は自分達がつくった制度なのに、技能実習生の社会保険、厚生年金などについては全く決まっていませんでした。

民間人になって政府に法改正させるのは大変でしたが、技能実習制度の確立のため政府と折衝して一つずつ形を作ってきました。何がなんでもやり抜かなければならないという気持ちがないとできません。それはやはり母校で学んだことが多かったからだと思います。

実習生が母国に帰ると日系企業に便利に使われますが、日系企業に勤めると自分しか助からない。実習生が5人雇う会社を興せば自分も含めて6人の失業者が助かり、母国の雇用に貢献できます。

技能実習生には「<世界のパナソニック>、<世界のホンダ>を君たちの中から出せ」と言っています。技能実習生が起業した最も規模の大きい企業はインドネシアで社員2000名、大企業です。と

- やなぎさわ きょうえい / 1943年7月30日生
- 1969年3月 法政大学大学院社会科学研究所私法学専攻修士課程終了
- 1969年4月 労働省入省
- 1984年5月 石川労働基準局監督課長
- 1985年9月 岐阜労働基準局監督課長
- 1987年4月 労働省労働基準局中央労災補償監察官
- 1989年4月 同局庶務課長補佐
- 1990年7月 労働事務次官付
- 1992年7月 福島労働基準局長
- 1993年4月 勇退
- 同月 財団法人 中小企業国際人材育成事業団常務理事
- 1995年3月 財団法人 中小企業国際人材育成事業団専務理事
- 4月 財団法人 中小企業国際人材育成事業団 理事長
- 2011年4月 公益財団法人 国際人材育成機構 会長

にかく「母国に帰ってから会社をつくれ」といっています。

日系企業に一時は勤めてもいい。しかし本来、インドネシアの経済はインドネシア人、ベトナムの経済はベトナム人の手でというのが私の願いです。この20年で技能実習生は3000社を起業しました。これから30万社、300万社と増やしていければと思っています。

日本は北海道から沖縄まで平らです。どういう意味で平らかというと文化水準、経済水準、多少の違いはあるがほぼ同じです。ところがインドネシアでもベトナム



アイム・ジャパン技能実習生留守家族とともに



インドネシア共和国ユドヨノ大統領とともに



柳澤会長(右)にお話をうかがう横内徹編集委員

ムでも縦の国です。国内でも、地域内でものすごい格差がある。縦に深い(格差のある)国を日本のようになんとか平らな国にしたいと思っています。そうしないとその国の本当の発展はありません。それが私の夢です。平らにするにはやはりその国の国民が自分達で会社を興して自分達で経済を担わないといけないと指導しています。そのために技能実習生を引き受けています。

私共は海外政府派遣の技能実習生を引き受けていますから、各受け入れ企業には各国大臣から手紙がきます。「今度、御社に入る若者は政府が責任をもって選抜し、今後の国づくりに役立てていきたい若者です。どうかしっかり教育をお願いします」とそういう内容の手紙です。通常大臣から直接手紙がくることはないでしょう。

## 「志=何のために生きるのか」を持つことが必要

技能実習生と比べて、日本の若者にはまず覇気が足りない、やる気が足りません。技能実習生は自分達の国を自分達で作っていかうとしていますから、目がきらきら輝いています。ところが今の日本の若者は大学をでて「何で俺がプレス工場で油にまみれて仕事しなければいけないんだ」みんなそう思っています。「楽

な仕事につきたい」と。これでは日本はつぶれます。一次、二次産業がなくては、第三次産業だけで国が成り立つはずがありません。そういう意味で覇気がない。あと「規律」が駄目ですね。実習生の規律の方がいいですね。もう一つは「志」を持ってもらいたいということです。何のために自分が生きるのか、何のためにこの仕事をしているのか、そういう「志」が必要です。

私は70歳ですが、わりあい若くみられます。志を持っていると人間、老けないですよ。やっぱり「志」が必要。ただ、私の職業生活は幸福だった。例えば労働省職員の時、働く人たちのために流す汗と涙を忘れるなど。これを忘れたら労働省の職員ではないと思っていました。今は技能実習生のために流す汗と涙を忘れたら、アイム・ジャパンの職員ではないと。志をもっているから幸福な人生を送ることができました。

自分がなぜ、この仕事をしているのか、そういう志は必要だと思います。今の若者にはだんだん希薄になってきているのではないかと思います。だから清陵生にはぜひそういう「志」を持ってもらいたい。若いうちから。やはり自分の志に向かって仕事をしていくことが大事ではないかと思います。

日本は諸外国にくらべて起業する際、

環境的に整っていないところがあるといわれますが、私はそうは思いません。私だって起業したんです。ゼロから始めました。補助金はもらっていないし、天降りでもありません。本人にそういう気持ちと忍耐力があればできると思います。それは個人のモチベーションのありようだと思います。京セラの稲盛さんも本田さんも一代であそこまでもっていったわけです。また、楽天、エンジャパンもそうです。私はまだまだ日本もチャンスはあると思います。本人の志とやる気だと思います。

## 「自分の人生は自分で責任を負え」といった校風が支え

清陵のような高校は全国をみてもほとんどないと思います。ただ、はなはだ残念なのは昔の気風が薄らいできているのではないかということ。昔の姿に心を戻してもらいたい。進取の気性とか質実剛健とか、あったでしょう。私は劣等生で非常に成績が悪かったんです。ただ私は学歴と職業能力は別だと思っています。大学よりも高校の影響の方が大きいのではないかと思います。

そういう意味では清陵の「勉強する奴はしろ、したくない奴はしなくてもいい。そのかわり、自分の人生の責任は自分で負え」といった清陵の校風があつてはじめて、今の自分があつたんじゃないかと思えます。後輩には特に「志」を持ってがんばってもらいたい。昔の校風、私はすごいと思います。アメリカンドリームみたいな話も今後、ないわけじゃない。本人の発想と忍耐、これは諏訪というか、あの地域のいかなる苦難にも耐えてがんばっていくという気風でしょう。それがあればかならず成功すると思います。

(横内徹)



ベトナム社会主義共和国ズン首相とともに

## ジャーナリスト対談

# 世界の安定と日本の安全

～自ら省みて、世界をつなぐ発言をしていく日本に～



**宮坂宜男氏**  
(80回生)

経済も社会も現システムが疲弊し、大きな変化を待ち望む、歴史的転換期の今。歴史を振り返り、世界を見渡し、これから往く道についての示唆を、時代をつないで世界を舞台に活躍してきた報道記者二人から伺いました。



**伊藤力司氏**  
(56回生)

●みやさか よしお／岡谷市生まれ  
1982年 国際基督教大学卒業、共同通信社入社  
1982～1990年 大分、鹿児島、福岡支局を経て外信部  
1991～92年 ニコシア支局長  
1994～95年 ベオグラード支局長  
1997～00年 ワシントン支局  
2003～06年 ワシントン支局次長  
2012年～ ニュースセンター・副センター長(現)

●いとう りきじ／諏訪郡玉川村生まれ  
1958年 東京外国語大学卒業、共同通信社入社  
1969～70年 サイゴン支局長  
1972～75年 パリ支局長  
1982～83年 ハノイ支局長  
1985～94年 国際局次長、論説副委員長  
1986～98年 専修大学文学部非常勤講師  
2008～10年 諏訪東京理科大学非常勤講師

### 共同通信外信部記者として

伊藤：私が最初に海外に行ったのは1967年です。羽田に親族が集まってお見送りしてくれて、そういう時代でした。フランス政府の給費留学生の試験を受けて、APF 通信社に研修に行ったのです。日本人は、ファッション評論家がパリのショーウィンドーをたくさん撮影してね、日本に帰って似たような物を作って、という知的所有権侵害の時代でしたね。

パリはすてきな街でしたが、言葉も流暢にしゃべれないし、「お前馬鹿か」みたいな扱いをされるし、痩せましたね。

親がいて子どもがいて兄弟で育ってというのが我々普通の感覚ですけど、彼らは基本的に神様がいて自分がいるんだっていう、キリスト教社会は冷たい社会だなと思いました。

2度目にパリに行ったのは1972年、ベトナム和平会談の時ですが、5年くらいの間に日本が高度成長期に入って、技術革新が進み、ホンダのオートバイが世界

を制覇した時代で、日本語を勉強するフランス人が増えていました。

その前にベトナム戦争中のサイゴン特派員に。ベトナムでは日本人はおとなしくて優しく知的だと「ホンダ」の国だと大事にされていたんですが、私は一重まぶたのため韓国人に見られて、「ダイハン(大韓民国の略)」って飲み屋で冷たくあしらわれて。

日本は平和憲法があったおかげで、アメリカに「行け」と言われても「行かれませぬ」と頑張れたんだけど、韓国は米韓防衛条約でもって「行ってくれ」と。で、真面目にベトコンを殺したんです。だから嫌われていたんですよ。

アジアでは華僑の力が偉大です。タイでもフィリピンでも、中国から出稼ぎに来て3代位経つとその国の経済を握っている。かなわないですよ。

### 後輩の現役記者として

宮坂：私は1990年4月に博多から本社の外信部に来て、その年にイラクのクウェー

ト侵攻が起きたんです。それで現地に出張して、結局イラクに10回くらい行きました。

中東の人たちって、日本人からすると、メンタリティが両極端じゃないかと思えます。ものすごく人懐っこいんですが、ものすごく刹那的で。砂漠の中で敵か味方かと生きてきた人たちなんだと思うんですよ。

その戦争が終わった後に今のキプロス共和国のニコシアで、バイルート支局の避難先だったキプロス支局長を1年くらいやっていました。

当時キプロスの記事って全くなくて、イラクとレバノン、ヨルダンなどの取材が主で、ベッカー平原で日本赤軍の人たちも取材しました。最後にその支局の看板を引っ剥がして帰ってきました。

それで、1994年に今度はユーゴスラビアのベオグラードに。チトーの時代が終わってボスニアで内戦が激化している時で。悪化した責任の一端はドイツにもあるんです。先に一方的にクロアチアの独

立を認めちゃって。セルビア人主導の国がユーゴスラビアだったんですが、完全にセルビア人が悪役になって。当時セルビア人指導者のカラジッチに何回もインタビューしたんですが、捕まって今ハーグで裁判にかけられています。隔世の感がありますね。

その前にソマリアに1カ月くらい行ったんですが、当時アメリカのクリントン政権で人道介入っていうのをして。能天気。「ブラックホークダウン<sup>注1</sup>」っていう映画になっていますが、現地の攻撃を受けて米兵が殺されてとっとと逃げた。

ソマリアに飛行機をチャーターして行きました。現地ではカラシニコフ銃を持った少年を二人護衛に雇って。政府が崩壊して警察がないところほど危ない所はないです。皮肉なことに独裁国家は監視体制が整っているので治安が良いです。

そして戻ってきて、今度はアメリカに行ってワシントンに3年いました。クリントン政権で、モニカ・ルインスキーとの不倫問題を毎日議会でやっていました。能天気な経済好調な平和な時代でした。

その後2003年にもう一度ワシントンに派遣されて。イラク攻撃の直前ですね。

## 米中の覇権争いの問題

**伊藤**：今世界に二つの大きな問題がある。この前の清陵勉強会<sup>注2</sup>の時もお話しましたが、太平洋を挟んだ米中の覇権争い。資本主義のボスとしてアメリカの、最近日本も真似している、お金を垂れ流すやり方がいつまで持つか。一方で、中国がものすごい勢いで伸びてきていますね。170年前のアヘン戦争からの「屈辱の歴史」を晴らそうとしている。

下り坂のアメリカ覇権国家と上り坂の中国と、その間に日本は存在するのである意味非常に難しい。「千萬人…」の孟子など東洋の思想と「人権・民主」のアメリカ文明の、双方を理解できる日本人が米中の懸け橋役を果たすようになれば、素晴らしいことなんですけれども。

## キリスト教徒対 イスラム教徒問題

**伊藤**：もう一つの大きな問題はイスラム教徒対キリスト教徒の争いですね。パレ



現在富士見町在住。恵まれた環境の中でジャーナリスト活動継続中の伊藤氏(右)

スチナ問題あり、イランの核兵器問題あり。

近代に欧米列強が世界中を植民地化しましたが、中世まではイスラム文明の方が進んでいたんですね。ギリシャ・ローマの文明は実はアラブ世界に移っていたんです。

中世のヨーロッパっていうのは遅れた社会で、その当時のソルボンヌ大学等ではラテン語を第1外国語として勉強することになっていたんですが、第2外国語はアラビア語だったんです。アラビアには古代エジプト以来の天文学あり、数学あり、哲学ありと。

17世紀以降は、カントとかパスカルとか、キリスト教社会の中から合理主義が生まれて、今の近代文明を広げていった。その19世紀以降のイスラムの屈辱の歴史の一つがパレスチナ問題ですね。

キリスト教社会にはユダヤ人を虐殺したという贖罪意識があるんです。それに、アメリカにはものすごく有力なイスラエルのロビー団体があって。ユダヤ人はお金持ちでもあるしね。

それに対し、イスラム教社会が段々とまた力をつけてきて、キリスト教社会に屈従しなくてはならなかったのが目覚めてきて、テロという形などの反発になっている。

アラブ世界に行くと、日本人ってとても歓迎されるんです。俺たちのことを侵略しなかったって。キリスト教社会に対抗したアジア社会の友人だと思われていたんです。そういう意味では、キリスト

教社会とイスラム教社会の、東西の融合のために「千萬人…」の精神で、日本が「仲良くやっていきたい」って発言していくべきだと思います。「自ら省みて」アジアを侵略した歴史は反省してね。

## 日本が世界で何ができるか

**宮坂**：アメリカはある意味非常に民主的で多様なんで、「千萬人…」っていう精神って尊重する風土があるんですが、日本は良くも悪くも調和的で協調的。これは違うって言える素地が日本にありそうではないですね。学校教育などによる部分も大きいと思いますが。アメリカと比べて、日本の学校はとても閉鎖的で自由闊達に各自が意見を言うことが重要というような教育をしていない感じがします。

伊藤先輩が言われたように、中東においては日本って侵略とかに手を染めていないので、例えばイラクでの日本のイメージは「ダットサン」なんです。良い車作ってるって。歓迎されるんです。

ただ、中東に行ったら一番聞かれるのは、「あなたの所ってアメリカによって原爆落とされたのに、なんでアメリカなんかとつるんでるんだ？」って。難しいのはアメリカとの関係で、アメリカの核の傘の下にあって、どうやって安全保障を考えていくのかっていうところ。

最近の出来事でいえば、アメリカのイラク攻撃ってどう考えても不必要だったんですよ。アメリカ人は自分たちがナンバーワンだと思っているから、イラクは

なんだか危なそうだし、どうせ簡単にぶせるんだから国際社会が文句言っても自分たちで攻撃しちゃえ、ということになったんだと思います。アメリカの奢りってものすごく強いから、日本が止めることはできないにしても、異議を挟むことは可能だったでしょう。アメリカの核の傘で守られているのであっても、そこで何か言う力はあると思うんですよ。

中東においてはアメリカにとっての最大の同盟国はイスラエルです。イラク攻撃もアメリカだけでなく、イスラエルへの脅威も除去するという意味もありました。

ユダヤ人って、大ざっぱに言ってイスラエルに570万人いて、アメリカに530

万人いて、さらに全世界に300万人いるっていう構図なんですね。だから、アメリカ国内でのユダヤ人の影響ってものすごく大きくてアメリカの外交に与える影響は大です。そういう構図の中で考えると、日本って中東での紛争に手を染めてないから、もっと客観的な立場から意見を言ひやすいとも言えます。

逆に、アジアの中で日本がリーダーシップを取るのは至難の業だと思いますね。手を染めているわけだから。

### 世界で発言していく日本に

伊藤：アジアは中国も日本も韓国も朝鮮も含めたひとつの大きな文明圏で、これは一神教の世界とは違う価値観がある。そこから、理想の、東西両文明、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教も含めた平和共存の世界を築いていこうじゃないか、って日本がリーダーシップって言えば、今覇権国じゃない60年間平和国家だと認められてきた日本が言った方がいいんじゃないか、と思います。

アメリカの軍産複合体や、ロビー団体のおかげで、日本は高いミサイルを買わされています。そういうことはおかしいって声を日本人はもっと上げた方がいい

いんじゃないかと思うんです。

「千萬人…」の道筋で、アメリカにも北朝鮮にも「武力で相手を威嚇するなんて時代じゃないですよ」って、日本も大事なことは「おかしいよ」っていえる気概を総体として持てたら。

日本人は基本的には平和的な民族です。江戸時代260年間の内戦が無かった国で、世界の歴史の中でそういう国はなかなか無いですから。ただ、明治維新以降西洋列強の真似をしてアジアにもものすごい迷惑をかけたという歴史を学んだ上で、自ら省みて、平和国家として世界から尊敬される能力は持っていると思うんです。

井の中の蛙にならずに、世界を見て、自ら省みる材料を持って、なお良いことを発見していきたいと思います。

注1・2001年に公開されたアメリカの戦争映画。リドリー・スコット監督。容疑者捕獲に30分で終わる予定の軍事行動が大規模な戦闘となり多数の死者が出た「モガディシュの戦闘」を描く。主演ジョシュ・ハートネット。

注2・1990年から行われている東京清陵会の夜の勉強会。隔月で国際情勢や社会問題など様々なテーマを同窓生の専門家から学びます。申し込みは事務局の米山迪男氏(63回生)。Mail:mk-yone3545@angel.ocn.ne.jp 会費500円。会場：剛堂会館ビル1階

(野々山理恵子)



「日本には世界に誇れるソフト・パワーがある」と話す宮坂氏(左)

## ■懐かしい諏訪清陵高校校舎が模型になりました!

今を遡ること39年、1974年の清陵祭、模型同好会により1/100の校舎模型が展示されました。図面がなくてメンバーはなんと自分たちで測量を行ったそうです。その学び舎も1989年に惜しまれつつ解体されてしまいました。しかし2012年、当時のメンバーの手により1/150ペーパーモデルとして蘇りました。紙製の組立キットは作り易いように抜きが入っているので、ゆっくり楽しんで作っても週末2回で完成します。約30cm四方で再現された校舎を見ると懐かしい青春時代が蘇ってきます。昨年購入していただいた方からも「こんな風になっていたのか!」「いろいろなことを思い出した」「いくら眺めても飽きない」など多くのお褒めの言葉を頂戴しました。(79回・丸山重久)

●1セット/3,500円

ご購入を希望される方は、東京清陵会事務局 TEL03-3812-5887 までお電話ください。



## ■ワーキング・グループ活動報告

東京清陵会活性化を目標として同窓会中堅層である82回生を中心に組織されたワーキング・グループ(以下WG)では、会員の増強、若手世代の参加者拡大のため、昨年の懇親会から、同窓会の魅力を高めるべく、活動を開始しました。

### ●東京清陵会懇親会で交流タイムを実施

昨年の東京清陵会懇親会の中で、中堅の同窓生と現役の大学生計30名による交流タイムを実施。「製造業」「非製造業」「資格・専門職」「事務局・WG」の4つのテーブルを設け、テーブルごとにテーマに基づいた交流が実施されました。本年の懇親会でも実施を予定しています。

### ●大学生交流会

東京清陵会初の試みとして、新卒歓迎・学生交流会を6月16日に南青山会館で開催しました。新卒の116回生を含む113~115回生の大学生世代から40人弱が参加。

談話会で鍛えた発信力で活発な質疑と、62回生から116回生と世代を越えて交流を深め、第二部は学年会とし、秋の総会での再会を約して、盛会の内に散会しました。

(WG:82回・北原謙)



交流会に集まった大学生と記念写真

## 2013年度 諏訪清陵高校同窓会パネル・ディスカッション

特別企画

# 学校知から社会知へ

## ～社会が必要とする真の学力・人間力を求めて～

約40年前に諏訪清陵で学び、大学を出て社会人となり、それぞれの分野の第一線で活躍する80回生を中心としたパネリスト4名。「学校知から社会知へ～社会が必要とする真の学力・人間力を求めて」をテーマに、2時間にわたり実施された濃密なパネルディスカッションの内容から、母校や後輩に向けて発せられた提言を抽出してお伝えします。



に繋がっていくと思います。「職業観」を身につけ、自身の生き方について考えることが勉強する上での糧となる。何のために仕事をするのか、生きて行くのかが見つかると思います。

もう1つは、「集団生活」が出来る場を作ること。サークルだったり学友会活動だったり、集団生活の中から学ぶことは多いと思います。少子化、核家族化が進み、社会生活の中で人間関係が希薄になっています。自分の置かれた立場とか役割が分かりづらく、社会経験ができない時代と言えます。集団生活の中では、時に争いや葛藤があり、そんな中で他人を思いやる心とか、規律を学んだり、降りかかる問題を解決する能力、新しいことに挑戦していこうという意欲が出てくるんじゃないかと思います。

### ●受験で試された知識は、本当に医師には必要なのか？

中村：医師になるための勉強では、記憶力に加えて「思考能力」が大切だと思います。

どの医学部でも数学が必修科目です。数学の良いところは、必ず答えは1つ。2つはない。証明問題でも命題は真か偽しかない。非常に分かりやすい。そこに導くために、自分の頭の中に空間を描き、



◆中村雅彦(80回生)

- とき 6月29日(土) 14:50～17:00
- ところ ホテル紅や

#### ●パネリスト

- ◆中村雅彦(80回生)  
自治医科大学卒。脳神経外科医／松本市立病院副院長
- ◆野首原悦子(80回生)  
明治大学法学部卒。弁護士／広島総合法律会計事務所所属

◆有賀修二(80回生)  
東京農工大学大学院修了。現在、(株)ジャパンディスプレイ執行役員

◆安川昌昭(81回生)  
東京大学工学部卒業。ミシガン大学にてMBA取得。現在、レックスマークインターナショナル(株)日本支社代表取締役社長

●コーディネーター・司会:大久保純男(80回生)

中村：自治医科大学は医局に残る制度がなく、僻地医療に携わることが義務化されているため、卒業後の早い時期から地方に出来ました。そのため、患者さんを病気だけではなく、人として見る目を養い、寄り添う心も若い頃から身につけることが出来たのではないかと感じています。今は、管理職として臨床医師を育てる立場にあります。

高校3年間は、身体的には安定し体力も充実してきます。ところが、精神的には大変不安定で「自分とは何なのか」「勉強は何のためにするのか」とか悩んだ時期でもありました。

これは思春期の独特な過程ではありますが、その時期に、職業や進学など将来のことを決めなくてはいけない。思春期の苦悩を抱えながら、自立を果たしていくという試練が待ち受けている時期と言えます。その試練をどうしたら乗り越えていけるかを、考えてみました。

1つは「職業観」を育む教育が大事だということ。医学・歯学・薬学などは、大学に入った時点で職業が決まっていますが、なるべく早い時期から職業体験をして、現場を見て欲しい。そこで得た実感や感動が、次の学習への意欲や目的意識

問題を解決していく。そういった、問題を解決していく思考能力が医師には求められます。医療は、患者さんの抱える心身上の問題点を抽出し、解決していく過程と言えます。たくさんの鑑別診断の後に、なぜそういう病態に至ったのか、どういう治療をやっていくのか。思考能力を試すためには、やはり受験での数学とか幾何学とかは必要だと思います。あと、小論文もその人の思考過程を見るには適していますね。

診察の「診」は眼で診る、「察」は心で察すること。冷静に観察するには科学の眼が必要で、論理的な思考能力がなくてはいけません。一方、心で察するためには人間性がなくてはならない。「察する心」は学力試験だけでは測れなくて、それまでの経験とか、家庭環境とか、その人の人生観も加味されてくる。入試だけでは推し量ることは出来ませんが、30分くらいでその人の人柄まではわからない。

今、医学部では6年間で、医療面接の仕方とか、科学的な根拠だけではなく患者さんの物語をいかにして傾聴するか、心を察する力を養う教育が進められています。さらに、卒業後に2年間の臨床研修が義務づけられており、この中で「広く総合医としての診療能力の修得」、「医師としての人間性の涵養」が大きなテーマになっています。



◆野曾原悦子(80回生)

野曾原：30数年ぶりの清陵で、一番変わったなあと思うのは、女子生徒の増えたこと。4割が女子生徒と伺いましたが、私たちの頃は、女子はクラスに多くてもせいぜい5人でした。体育の授業は、女子だけでというわけにはいかず、男子に混ざってマラソンやサッカーをやりました。

なでしこジャパンよりずっと前から、私たちはサッカーをやっていたわけです。それでも高校時代は、知的好奇心をかき立てられる時期で、楽しく学校生活を送ってきました。

1987年司法修習を終え、未知の土地広島で弁護士を開業しました。なぜ、広島か。それは高校時代からずっと思っていた、「一生仕事をする」という一念からです。私の夫は転勤族のサラリーマンでしたが、弁護士は土着商売。夫の転勤に合わせて各地を転々としていたら、仕事にならない。それで、夫がいずれは自分の故郷広島に落ち着きたいと言っていたので、私は先に一人で広島へ行くことにして、ずっと広島で弁護士を続けてきたのです。

広島でも、清陵と同じように、女性が少なかったですね。当時、弁護士は全国で13000人くらい。女性は600~700人。広島の弁護士は、全体で約200人のうち、女性は私が行く前は4人。最年少は49歳。そこに、当時20代の私が入ったものですから、周囲はだいたい面喰ったようです。でも私は、あまり気にしませんでした。周囲から奇異な目で見られても、苦勞を感じなかったのは、心の中で「自反而縮雖千萬人吾往矣」をぶつぶつと唱えながら自分を励ますことができたから。清陵での経験が、ものすごく役に立っていると思っています。広島弁には大変苦労しましたが(笑)。

### ●司法試験の制度について

野曾原：司法試験に求められるものは、膨大な数の事例に、また膨大な数の法令の中から当てはまるものを持ってきて、法令を解釈して当てはめて、それをきちんと文章で表すことができる能力です。それは、法律家になってからもずっと必要な能力です。

それだけではなく、司法試験にも、試験としてのテクニック、ノウハウは要求されています。司法試験にもコツがあり、わからない問題は飛ばすなどのコツを身につけている人の方が、早く受かります。難関と言われる大学の人が、司法試験でも数多く合格していることからして、試験が上手な人が司法試験も受かるという

実態は確かにあります。

ただ、テクニックを駆使して試験に受かることだけを目標に勉強したら、これほどつまらない勉強はないだろうと思います。やらなければいけない科目は多く、分量も多くて、時間がかかる。最近はロースクールに行かないと司法試験は受けられなくなりましたから、お金もかかります。合格だけを目標にするのではなく、受かってから何をしたいかというモチベーションがなければ、やれないものだと思います。もっと言うと、モチベーションがしっかりしていると、いわゆる超有名大学ではないところからも、いっぱい受かっていますよ。



◆有賀修二(80回生)

有賀：私は、清陵の「放任主義」を目いっぱい謳歌した生徒だったと思います。東京の大学に行ったのも、当時『同棲時代』という映画が流行っていて、東京へ行ったらそんな学生生活が送れるんじゃないかと思っていました(笑)。

高校時代の経験で役立ったのは「試胆会」です。試胆会が終了すると、学年の上下がなくなり、フェアな関係となる。それは、会社生活でも役に立ちました。部下に年上の人がつくこともあり、そういう人たちに気持ち良く働いてもらうにはどうしたらいいか、実は高校時代にタテヨコの間人間関係を学びました。また、「恥をかく」勇気を学びました。初対面の人とお付き合いする時、自分がどんな人間か先に殻を脱いでしまうと本音の話ができて、仕事がスムーズに運びます。

個人的な意見ですが、僕は突出した学力は企業を受ける時も、またその後の仕事をする上でも必要ないと思います。むしろ邪魔だと思っています。ただ、突出した学力はいらないけど、一般的な学力

は必要だと思いますよ。

(高校と大学の学問の違いは)とにかく暗記しなくてもいいということです。卒論とか修士論文は、自分で実験して、その結果をどう解釈して、仮説を立てて、こう解釈して説明できるはずだということを導きだしていく。もちろん、参考文献を読んだり、あらゆる知識をあてはめて、自分なりに法則を出す。最終的に、それが「有賀の法則」とか発表できればいいわけです。それが新しい発見であり、そういうことを導き出していく過程が結構楽しく「学問」できたと思います。

### ●40代半ばで社長になった 秘訣はあったのか?

**有賀:** どうすればそうなれるかわかったら、ここにいる皆が社長になれますよ(笑)。今、多くの企業の経営者と話す機会が増えました。そういう人たちに共通するのは「情」をうまくコントロールしているということです。「情」は、「情熱」であったり「情念」であったり、それで何万人という社員を導いていくわけですから、そういう情熱を持って熱く語れるということ。もう1つは、話がロジカル・シンキングで、極めて論理立っていて、それを聞いている社員も、「この人についていけば間違いない」と思わせること。そういう「情」と「理」を奏でる力=「人間力」や「術」を持った人たち、それが企業のリーダー(トップ)に求められる要素ですね。

今思うと、清陵での人間関係が役立ったのは、比較的フェアに人と付き合えること。物おじせず接することができる。それは、一級先輩とか一級後輩とか、わりと近い年齢層でしたが、学年を超えて人と話をできるいい空気だったですね。それを持って社会人になると、もっと大きな場面で生きてきます。

あと、恥をかくことを恐れない。恥ずかしいとかで前に行かないとダメで、自分から人と付き合うことを恐れない、という気分は清陵の「気風」の中にあっただと思います。

.....  
**安川:** 私は81回生ですが、「お前はいっぱい失敗しているから適任だろう」と呼



◆安川昌昭(81回生)

ばれました(笑)。

私が今、清陵の現役の学生に言いたいのは、将来自分は何になりたいかと考えていても、変わる可能性もあります。私は高校時代、理系一本でしたが、現在は理系ではない営業とかマーケティングをやっている——「歌って踊れるエンジニア」と呼ばれています——今思うと、もう少し国語、歴史、地理とかも勉強しておけばよかったと思います。なぜなら、今、日本だけではなくグローバルなお客様と接する際に、会話の中で日本のことを聞かれたりします。また、相手がどんな人か国の背景を知っていた方が会話が成立する。知らないと話せないのも、技術だけでは営業はできないと思います。自分が興味なくても、将来役に立つこともあるので、高校時代は、一見つまらないと思う授業でも、ちゃんと受けておいた方がいいと思います。

東大に入った人は、確かに知識は持っています。でも、卒業してからどうかというと、(すべての東大生がよかったら)もっと日本は良くなっていると思います。そうっていないのは、東大を出ても何か欠けているものがあるんだと。それは何かというと、決断力がないとか、批判はするけど自分では何も決めないとか、安全主義、前例主義に凝り固まってしまうと東大の意義はなくなってしまう。確かに頭の良さや、知識の引き出しは持っている。問題があるときに分析する能力は持っている。でも、そこから「人間力」とか熱く語るためのビジョンを語る術は大学では教えてくれない。だから、「人間力」は別のところで身につけてはいけません。実際、高校時代に、友達とそういうことを語り合うのはいい経験だと思いますね。

### ●アメリカのMBA(経営学修士)を取得して、日本の教育に思うこと

**安川:** 根本的に日本の東大とは違い、MBAは正解がないんです。自分が正解だと思うことを教授と議論する。その時に、なぜそうなのか論理的に語るができるかが重要で、それができないと、いくら良い「解」を出しても教授は認めてくれない。逆に、どんな変な「解」でも、なぜそうなのか論じられれば、高く評価してくれる。MBAというのは、唯一の「解」を求めるのではなく、いろんな分析のツールや引き出しを提供してくれて、最終的に、それを皆の前で論理的に語り、実行するので、一方的な日本の授業とは違いますね。最近、MBAだけではなく日本からの留学生が減ってきたのは残念なことです。韓国や中国の学生がクラスの半分を占めて、日本人は隅の方に追いやられているのは、残念でなりません。

### ●中高一貫を前に、 母校の未来に期待すること

**安川:** 将来に向かっていろんな知識を吸収できるいろんな引出しを頭の中にして、吸収する土台を作りたい。

**有賀:** 中学から選ばれた集団で生活することは、将来の人間力形成に対してネガティブに働くこともあると思う。学校以外のところでどれだけ友達ができるか、チームで活動できるか、ボランティアでもいいので活動して欲しいです。

**野曾原:** 6年間かけてじっくり自分の将来を考えられるし、中学1年の段階から高校3年生の様子を間近に見られるというのも良いと思いますね。

**中村:** 「自反而縮雖千萬人吾往矣」はいい言葉ですが、誤解して「千萬人を敵としても」ととらえられることがあります。「千萬人」を「環境の変化」と置き換え、自分を取り巻く環境の変化があっても流されることなく自分の道を通してほしい。高校3年間は、主体的に自分で考え、自分の生き方を切り開いていく大切な時期だと思います。あまりモラトリアムにならず、自分の希望をしっかり持ってください。

(採録・構成: 脇坂守一/藤森正樹、米澤あ子、宇津木マリ) ※敬称略

### 2013年度 同窓会定期総会報告

2013年度定時総会は、6月28日、ホテル「紅や」で開催された。総会では、会務報告、決算および2013年度事業計画・予算が原案通り承認された。続くパネルディスカッションでは「学校知から社会知へ」～社会が必要とする真の学力・人間力を求めて～をテーマに行われ、会場の興味を引き付けた(特別企画ページ参照)。懇親会最後の恒例校歌斉唱では、壇上の次回当番幹事81回生をしり目に52回生の大先輩がマイクをもってリードするなど大いに盛り上がった。

### 2012年度 東京清陵会定期総会報告

第46回東京清陵会定期総会・懇親会は、2012年10月12日(金)例年通りアルカディア市ヶ谷で開催された。今年の当番幹事は79回生が担当した。

参加者は来賓2名を含めて185名、うち現役学生は16名であった。減少傾向にあった総会出席者数は昨年を上回った。定期総会は、午後5時より「飛鳥の間」で。会務報告、会計報告、監査報告、事業計画、予算案ならびに役員改選等の議題を審議し終了した。役員改選では藤森宏一会長及び長田宏子(62回)、金子充宏(65回)、平林千義(67回)の3名の副会長は再選され平林千春(69回)副会長は退任された。(詳細は別紙「会費についてのお知らせ」役員一覧をご覧ください)

懇親会は、午後6時より「富士の間」で79回生原田健太郎さんと大平晋子さんお二方の司会により始まった。坂本純さん(79回)の開会の辞に続き、藤森宏一会長(63回)は挨拶の中で東京清

陵会活性化のためのワーキンググループの活動と清陵勉強会が会の行事に加わったことなど話された。ご来賓の松下勲同窓会長(59回)は母校の来る120周年記念について、佐藤尚登・清陵高校校長は平成26年4月開校予定の中高一貫校について、それぞれ挨拶のなかで話され会場の関心を引き付けた。

鏡開きは、最年長の46回生増沢喜美夫さんと最年少の111回生細川隆太郎さんを含む5人により行われ、長崎の遠方よりご出席の斎藤寛さん(58回)の乾杯で和やかな懇親の会は始まった。

今年も例年通り学年別着席のテーブルで、時にはテーブルの間を歩きかしながら、久方ぶりの挨拶など談笑の輪は広がった。新たな試みとしてワーキンググループによる現役大学生と中堅の同窓生計30名による交流タイムも設けられ魅力ある同窓会を演出した。

最後は、恒例の日本一長いといわれる校歌を斉唱。当番幹事佐藤敏夫さんのリードで壇上の79回生と会場が一体となり、高校の青春時代を偲び声高らかに歌いあげた。閉会挨拶は協阪守一さん(80回)、藤森正樹さん(80回)の発声で、万歳三唱し、午後8時45分閉会した。大いに盛り上がった懇親会であった。

### 東京清陵会の現況

データベースから東京清陵会の現勢を見ると次のとおりである(2013年7月31日現在)。

#### 1. 東京清陵会会員の定義

- (1) 首都圏(東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城、群馬、栃木)在住の同窓生(ただし、退会申出者を除く)。
- (2) 転居して首都圏を離れたが支部会

費を納入している同窓生。

2. 会員現勢 総数3,363名(住所不明者1,123名を除く)

#### (1) 都県別会員数

東京都1,570名、神奈川県694名、千葉県421名、埼玉県416名、茨城県72名、群馬県25名、栃木県24名、その他141名

#### (2) 年次別会員数(別表1)

3. 会費納入状況(2011年4月～2014年3月会計期:2013年3月末現在)

#### (1) 納入者数 516名

#### (2) 年次別会費納入者数(別表1)

#### (3) 年度別納入額および人数(別表2)

#### 4. 会費・賛助金納入のお願い

2005年度から実施した賛助金が毎年会費を上回り辛うじて年間収支のバランスを維持しておりますが、2012年度も会費未納者が多く賛助金に頼る極めて不健全な状況が続いております。

今年は2011年度からの会計期(3カ年)の最後の年です。従来どおり、会費ならびに賛助金の納入をお願いいたします。東京清陵会はお支払いいただいた会費で運営されていることをご理解いただき、会費・賛助金の今年の納入にご協力をお願いします。

#### 5. 会費等の改訂について

会の永続的発展のため、安定運営の観点から、一昨年の総会にて、2014年3月末での終身会員制度廃止と2014年以降の会費・納入方法を見直すことが承認されて、今年の総会で新たな会費および納入方法等を審議いただきます。

改訂案は以下のとおりです

- ・会費は、年額2,000円とし、毎年徴収する。
  - ・会費免除会員は、25歳以下および80歳以上の会員とする。
  - ・賛助金については、従来通りお願いする。
- 会長 藤森宏一(63回)

### 「東京清陵会」 ゴルフ同好会



## 第20回ゴルフコンペのご案内

会員の交流・親睦を兼ねてゴルフコンペを下記の要項で開催します。同期生などお誘い合わせのうえ、奮ってご参加ください。

- 日時:10月24日(木) 9時集合 9時40スタート
- 場所:若洲ゴルフリンクス(首都高速/新木場ICより3km。JR京葉線・東京メトロ有楽町線・東京臨海高速鉄道りんかい線・「新木場駅」より、クラブバス10分)
- プレー代:13,745円(キャディ付) 会費:5,000円
- 参加希望の方は、☎03-3518-2385 スタジオパラム=清水(84回)まで。FAXの場合は、住所・氏名・卒業回・連絡先を明記の上、お申し込みください(FAX:03-3518-2386)。
- 幹事=藤森宏一(63回)、小海健治(84回)

昨年10月16日にオークヒルズカントリークラブで行われた第19回ゴルフコンペ。13名が参加、優勝は仁科真爾さん(64回)。



別表1 年次別会員数と会費納入結果(2013年7月31日現在)

回生	現員	不明	計	会費	回生	現員	不明	計	会費	回生	現員	不明	計	会費	回生	現員	不明	計	会費
~32	5	19	24	0	55	25	1	26	11	76	62	17	79	28	97	16	19	35	0
33	1	3	4	0	56	100	7	107	60	77	65	16	81	33	98	12	26	38	1
34	1	1	2	0	57	102	11	113	68	78	70	29	99	18	99	5	11	16	0
35	5	2	7	1	58	89	11	100	54	79	76	5	81	39	100	7	17	24	0
36	1	5	6	0	59	94	9	103	90	80	78	4	82	18	101	1	12	13	0
37	5	3	8	1	60	97	17	114	101	81	49	19	68	15	102		5	5	0
38	7	3	10	1	61	84	13	97	67	82	50	23	73	11	103	2	5	7	0
39	12	4	16	1	62	104	7	111	79	83	72	31	103	34	104	1		1	0
40	9	4	13	3	63	97	14	111	99	84	50	25	75	14	105			0	0
41	19	5	24	5	64	80	13	93	75	85	51	40	91	15	106	3	4	7	0
42	18	3	21	5	65	80	12	92	56	86	42	37	79	6	107	1		1	0
43	23	2	25	4	66	76	19	95	55	87	40	24	64	2	108	3	10	13	0
44	27	7	34	4	67	95	17	112	58	88	29	46	75	8	109		8	8	0
45	29	3	32	9	68	78	21	99	53	89	44	46	90	9	110	5	4	9	0
46	33	9	42	8	69	106	15	121	77	90	41	27	68	5	111	1		1	0
47	40	6	46	10	70	90	23	113	48	91	26	36	62	1	112	2		2	0
48	49	9	58	22	71	80	22	102	34	92	25	43	68	5	113	13	1	14	0
49	66	7	73	27	72	57	13	70	32	93	20	29	49	1	114		1	1	0
50	67	9	76	26	73	80	12	92	37	94	26	17	43	0	115	4	1	5	0
51	83	18	101	53	74	74	22	96	34	95	17	26	43	0	116		3	3	0
52	90	6	96	57	75	55	20	75	17	96	21	32	53	1	合計	3,363	1,123	4,486	1,706

注1) 現員:東京清陵会に登録されている会員で、所在不明者を除く。

2) 不明:以前東京清陵会に所属して現在所在不明のもの。

3) 会費:今会計期(2011.4~2014.3)会費完納者および前納者の人数。

会費免除会員(2011年度時点で75歳以上、58回生以前)の人数1,061名  
(内終身会員325名)4) 会費納入者数1,706名と今期納入者数の差は終身会費納入者、  
その他による。

5) 終身会費納入者数1,230名

(内 死去:157名、所在不明:77名、退会他:35名)

別表2 年度別会費等納入額および納入者数

前々々々期納入額総計(1997.4~2002.3)	7,499,200円	1,371名
前々々期納入額総計(2002.4~2005.3)	1,667,400円	541名
前々期納入額総計(2005.4~2008.3)	6,436,785円	1,167名
前期納入額総計(2008.4~2011.3)	4,406,000円	812名
内 訳		
2008年4月~ 小計	1,960,000円	(456名)
2009年4月~ 小計	1,334,000円	(364名)
2010年4月~ 小計	1,112,000円	(290名)
今期納入額総計(2011.4~2014.3)	2,592,760円	516名
内 訳		
2011年4月~ 小計	1,578,630円	(403名)
2012年4月~ 小計	996,130円	(239名)
2013年4月~ 小計	18,000円	(4名)

注) 前々期、前期および今期納入額には、賛助金も会費として処理されている。

別表3 会員数と次期繰越金の推移

年	会員数(名)	不明者数(名)	次期繰越金(円)
1997	4,068	329	15,008,425
1998	3,944	437	16,330,130
1999	3,797	546	15,191,116
2000	3,832	485	13,660,668
2001	3,628	649	11,499,913
2002	3,768	672	10,266,836
2003	3,630	767	8,951,881
2004	3,528	794	7,281,132
2005	3,410	894	6,192,586
2006	3,300	928	8,217,342
2007	4,000	698	8,385,652
2008	3,849	818	8,627,401
2009	3,822	813	9,108,456
2010	3,628	968	9,075,532
2011	3,595	960	8,543,349
2012	3,421	1,089	8,677,237
2013	3,363	1,123	8,165,247

注1) 次期繰越金は各年の3月現在

2) 会員数、不明者数は各年の7月現在(2004年は5月現在)

収支計算書(案)自2012年4月1日~至2013年3月31日(単位:円)

## 収入の部

科目	予算額	決算額	差異 (予算の方が)
1 会費	3,010,000	2,372,130	637,870
(1) 会員年会費(68名)	500,000	193,000	307,000
(2) 総会会費(168+16名)	1,360,000	1,376,000	△ 16,000
(3) 賛助金会費(171名)	1,150,000	803,130	346,870
2 諸収入	104,600	130,219	△ 25,619
(1) 寄付金	50,000	50,000	0
(2) 預金利子	1,600	1,219	381
(3) 会議費負担金	53,000	79,000	△ 26,000
当期収入合計(A)	3,114,600	2,502,349	612,251
前期繰越	8,677,237	8,677,237	0
収入合計(B)	11,791,837	11,179,586	612,251

## 支出の部

科目	予算額	決算額	差異
1 経費			
(1) 総会費用	1,160,000	1,111,932	48,068
(2) 会議費	180,000	185,540	△ 5,540
(3) 諸会費	150,000	74,500	75,500
(4) 印刷・通信費	820,000	747,377	72,623
(5) 事務雑費	25,000	25,116	△ 116
(6) 会報費	830,000	809,874	20,126
(7) 清陵勉強会	0	60,000	△ 60,000
(8) 予備費	20,000	0	20,000
当期支出合計(C)	3,185,000	3,014,339	170,661
当期収支差額(A)-(C)	△ 70,400	△ 511,990	441,590
次期繰越(B)-(C)	8,606,837	8,165,247	441,590

寄付金: 本部 40,000 学校: 10,000

2013年度収支予算(案)自2013年4月1日~至2014年3月31日(単位:円)

## 支出の部

科目	金額
総会費用	1,440,000
会議費	250,000
諸会費	70,000
印刷・通信費	750,000
事務雑費	20,000
会報費	800,000
清陵勉強会	60,000
HP運営費	300,000
予備費	10,000
小計	3,700,000
次期繰越	7,926,447
合計	11,626,447

## 収入の部

科目	金額
総会会費	1,440,000
会員年会費	600,000
賛助金会費	1,300,000
会議費負担金	70,000
寄付金	50,000
受取利息	1,200
小計	3,461,200
前期繰越	8,165,247
合計	11,626,447

(注) 2013年度予算収支差額は  
238,800円の不足となります。

# 東京清陵会2012年度会務報告

## 2012

- 4・12 第1回事務局会議(小林公認会計士事務所)
- 4・23 南信同窓連第45回親睦ゴルフ会(中山CC)
- 4・24 第133回清陵勉強会(剛堂会館)・講師 山崎俊一(80)
- 4・28 当番学年(79回生)第5回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)
- 5・10 若手会員との意見交換会(南青山会館)出席者14名
- 5・19 当番学年(79回生)第6回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)
- 5・19 南信同窓連定時総会(ホテルメトロポリタンエドモント)
- 6・2 本部同窓会常任幹事会・幹事会(清陵会館)
- 6・3 新田次郎生誕100年記念講演会(諏訪市民センター)
- 6・16 当番学年(79回生)第7回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)
- 6・26 第134回清陵勉強会(剛堂会館)・講師 小林和男(62)
- 6・30 清陵本部同窓会総会・懇親会(ホテル紅や)
- 7・3 会報臨時編集会議(神田シティホテル)
- 7・7 東京同窓連第48回定期総会・懇親会(アルカディア市ヶ谷)
- 7・18 会報臨時編集会議(第2回)(神田シティホテル)
- 7・26 常任幹事会(南青山会館)、出席者20名
- 7・28 当番学年(79回生)第8回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)
- 8・25 当番学年(79回生)第9回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)
- 8・28 第135回清陵勉強会(剛堂会館)・講師 小池一平(76)

- 8・30 学年幹事会(南青山会館)、出席者53名
- 9・15 会報「東京清陵会だより」23号発行
- 10・12 第46回総会・懇親会(アルカディア市ヶ谷)、出席者185名
- 10・16 第19回東京清陵会ゴルフコンペ
- 10・23 第136回清陵勉強会(剛堂会館)・講師 五味克成(74)
- 11・4~5 南信同窓連親睦旅行会(箱根)
- 11・7 南信同窓連第46回親睦ゴルフ会(中山CC)
- 11・10 当番学年(80回生)第1回進行会議/編集会議(扇寿司)
- 11・16 本部物故会員道志社先輩の慰霊法要・臨時常任幹事会(地藏寺)
- 11・15 第2回事務局会議(小林公認会計士事務所)
- 12・7 南信同窓連忘年会(東京オペラシティ東天紅)
- 12・4 第137回清陵勉強会(剛堂会館)・講師 市川一雄(56)

## 2013

- 1・19 当番学年(80回生)第2回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)
- 2・2 東京同窓連新年懇親会(アルカディア市ヶ谷)
- 2・16 当番学年(80回生)第3回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)
- 2・23 本部同窓会常任幹事会・幹事会(清陵会館)
- 2・26 第138回清陵勉強会(剛堂会館)・講師 伊藤力司(56)
- 3・13 東京同窓連第15回親睦ゴルフ会(越生ゴルフ倶楽部)
- 3・16 当番学年(80回生)第4回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)

# 東京清陵会2013年度事業計画

- 1 第47回総会・懇親会の開催(10月18日・アルカディア市ヶ谷)
- 2 会報「東京清陵会だより」24号の発行(9月中旬)
- 3 常任幹事会、学年幹事会の開催(7月、8月・南青山会館)
- 4 当番学年(80回生)編集会議、進行会議(随時・小林公認会計士事務所)
- 5 事務局会議(年2回・小林公認会計士事務所)
- 6 清陵勉強会(原則偶数月の第4火曜日・剛堂会館)
- 7 東京清陵会ホームページの管理
- 8 会員増強策の検討、実行
- 9 懇親ゴルフ会の開催
- 10 寒水会への参加
- 11 本部同窓会、南信同窓連、東京同窓連行事への参加

## 編集後記

昨年11月、約40年ぶりに顔をあわせた同期生。大丈夫かと思いつつ、編集長を引き受けました。これまでに培った経験を生かしてお役に立てればとの思いがあったのです。ここ数年は清陵精神が生きていく上での支えになってきたことを強く感じていました。諏訪を離れても生き続ける清陵魂、また志、夢を持つことの大切さを多くの同窓生に伝えていきたいという思いを込めて、今回、5

人の方々の貴重なお話を掲載しました。最後にご多忙の中、快く取材に応じていただいた皆様、ご協力いただいた皆様にお礼申し上げます。(横内徹)

### ★80回生★

代表幹事：脇坂守一 事務局：藤森正樹  
 会報編集：横内徹、野々山理恵子  
 幹事：高橋聡、矢崎秀実、矢島茂人、米澤あ子

# 訃報

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます(敬称略)。

氏名	年次	逝去年月日
立木長俊	(32回)	2006.
両角英一	(32回)	1997.12.
牛山明	(33回)	2011.8.18
原田文吾	(34回)	2007.12.3
延川千尋	(34回)	2013.3.17
宮沢正康	(34回)	2008.6.6
武居五郎	(35回)	2012.2.5
山川六方	(35回)	2013.1.16
今井方敏	(36回)	2013.4.1
清水信雄	(37回)	2008.6.11
宮坂泰三	(37回)	2012.6.23
伊東要助	(37回)	2012.3.31
東義人	(38回)	2009.7.3
森平之助	(39回)	2009.3.17
藤孝一	(40回)	2013.2.25
増村孝一	(40回)	2011.3.24
増村正信	(41回)	2012.6.5
新野宇門	(41回)	2013.1.21
小村清志	(41回)	2010.12.28
原田義武	(41回)	2011.8.15
樋口博康	(41回)	2012.4.24
高橋博一	(42回)	2012.12.4
高橋弘勝	(42回)	2011.5.10
栗久正賀	(43回)	2010.12.30
後保正忠	(43回)	2012.7.16
後島富貴	(43回)	2010.11.27
三好只一	(43回)	2011.10.18
宮沢好美	(43回)	2009.2.10
宮沢和高	(43回)	2011.10.31
山島利正	(43回)	2012.4.27
山松諒昇	(43回)	2011.6.24
浜勇夫	(44回)	2007.4.1
井上英一	(44回)	2011.1.26
井上進	(44回)	2012.2.3
井上春堂	(45回)	2012.6.10
井上義章	(45回)	2011.3.18
熊澤文夫	(45回)	2009.12.2
増澤大平	(45回)	2011.3.13
小口大介	(46回)	2013.2.16
小口大介	(46回)	2012.11.20
関忠雄	(46回)	2013.2.4
小池康一	(47回)	2008.2.
樋口平吉	(47回)	2011.9.29
北城幹雄	(47回)	2009.8.22
伊藤芳明	(48回)	2013.2.10
古山正一	(48回)	2012.9.
古山亨	(49回)	2012.7.22
片倉保明	(49回)	2011.12.19
神取喜彦	(49回)	2013.1.22
酒井清夫	(49回)	2005.10.28
青木清一郎	(50回)	2011.6.1
岩波春喜	(50回)	2008.2.19
岩波俊和	(50回)	2013.1.19
田中喜代志	(50回)	2012.8.2
名取賢次郎	(50回)	2012.1.3
宮坂忠	(50回)	2011.12.31
曾根原 勇夫	(51回)	2012.4.8
藤原 晴彦	(51回)	2010.1.14
藤原 俊二	(51回)	2012.6.21
山岡孝治	(51回)	2012.3.
山岡正治	(52回)	2013.3.10
牛山房弘	(52回)	2013.6.5
大和節雄	(52回)	2013.1.15
庄山達男	(52回)	2012.4.16
武川泰雄	(52回)	2012.4.25
吉澤鶴久	(52回)	2012.4.7
有賀益千代	(55回)	2013.3.24
藤森達夫	(56回)	2010.2.19
藤森守生	(56回)	2011.12.21
大坪靖	(57回)	2012.10.13
小池定雄	(57回)	2012.5.31
五味雄	(57回)	
野口亮	(57回)	2012.1.1
宮沢壮夫	(57回)	2011.4.3
桑澤秀雄	(58回)	2013.2.17
内藤源	(58回)	2012.5.26
藤森康秀	(58回)	2011.1.19
小岩井邦弘	(59回)	2011.12.25
武井悟	(59回)	2004.7.3
武井宏	(60回)	2011.2.6 ※1
小口賢司	(60回)	2010.12.29
小口周	(61回)	2010.3.9
小林政友	(62回)	2011.6.21
春宮明宣	(63回)	2013.2.28
藤森勲	(63回)	2012.9.5
中澤正始	(64回)	2011.4.14
野沢舜	(66回)	1999.1.
宮坂俊廣	(66回)	2012.6.14
原田安雄	(68回)	2012.2.27
三井健郎	(79回)	2013.3.25

●事務局に連絡が入った方  
 ※1:昨年度の会報で、ご逝去の年月日を誤って掲載したため再度掲載いたします。